

性隷姦長 ナナリ

淫獄の捕虜収容所

山本沙姫

表紙イラスト:舞猫ルル



試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『性隷姦長ナナリー 淫獄の捕虜収容所 前編』
『性隷姦長ナナリー 淫獄の捕虜収容所 後編』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



性隷姫長
ナナリ

淫獄の捕虜収容所

山本沙姫

表紙 / 舞猫ルル

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

ナナリー・ラングオールド

二十五歳の若さで艦長に就任した才女。優秀な指揮能力と女神と称えられる美貌の持ち主。

アンジェリカ・セイルフィン

旗艦「ネプチューン」の通信兵。優秀な軍人を輩出してきた名家のお嬢様である。

ロイル・ホルダー

ナナリーたちが捕まった捕虜収容所の所長。

シド・コジャック

ナナリーの父親の親友である男性。

西歴二〇二七年。南太平洋の一角に、熱き戦火が燃え上がっていた。人口一千万に満たない小国ながら強大な軍隊を有する独裁国家、レギオン帝国がその勢力拡大のため近海に浮かぶ豊かな島国、ティリグ共和国へ一方的な武力侵攻を開始したのである。

戦略と兵器開発技術に長けた帝国と、物量で勝る共和国。異なる長所を持つ国家同士の間争いは長期化し、終わる気配すら感じさせないまま七ヶ月目に突入した二〇二七年十一月七日。ティリグ領海の外縁部を行く、七隻の軍艦があつた。

第三機動艦隊。大型巡洋艦「ネプチューン」を旗艦とする、ティリグ共和国の海の守りの最前線を固める要。強力な対艦武装と超高感度を誇る各種探査装備を駆使して、領海を侵す帝国軍艦隊を撃退してきていた海の猛者達は、今日も監視の目を光らせている。

コツコツコツコツ……。

深夜一時をすぎた頃。分厚い雲に覆われた星明かり一つない空の下で、波静かな海面を滑るように進む駆逐艦の狭い通路を、一人の女性が微かに足音を響かせたゆつたりとした足取りで歩いていく。軽くシャギーの入った短い茶髪を、サラサラと靡かせて。

（異常は……ないわね……）

一七〇センチオーバーという高めの身長に反して、ふつくらとした顔立ちに低めの可愛らしい鼻という、まだあどけなさの残る少女を髣髴とさせる容姿をした彼女は、クリクリ

とよく動く大きな目で艦内を隅々まで見回している。

蛍光灯の明かりを反射して輝く瞳は黒く、深い艶はまるで黒真珠のよう。染み一つないきめ細かな肌は新雪を思わせるほど白く張りがあり、化粧なしでも十分すぎる程に美しい。(それにしても、今夜も静かだわ。こんな穏やかな日々が、いつまでも続けばいいんだけれど……)

赤子の手の平に似た可愛らしい耳たぶを、微かな波音がくすぐる。平和な大海原の囁きに耳を傾けつつ、誇らしく胸を張り背筋をピンと伸ばして歩む姿からは軍人らしい凛々さが滲み出ていた。

さらにライトグレーの上着に施された金糸の刺繍や、胸元に付けられた階級の高さを物語るカジキの姿を模った純銀製のバッジが、普通の若い女性にはない威厳も醸し出している。しかしお堅い服装はしていても、大人の女が持つ健康的な色香は覆い隠せない。

一步踏み出すごとにユサユサと大きく波打つバストは、九〇センチオーバーのDカップ。身体にピッタリとフィットした軍服の上からでも、綺麗な釣鐘型に張り出しているのがわかる。さらに程よく括れたウエストが、胸の大きさをより一層引き立たせた。

(みんなちゃんと任務もこなしているし、心配する事は何もナシ、か……)

船底への階段を下りたところで、彼女は前から工具箱を持った二人の海兵が来るのにくわす。武装関係の整備を担当する技師で、平穩な今こそイザという時のための備えに忙

しい。

「見回り、ご苦労様です」

「ご苦労様です」

狭いとはいえ大人二人が余裕で行き交えるぐらいはある通路だが、乗員誰もが彼女とすれ違う前にサツと脇へよけて敬礼し、畏まった口調で呼びかけてくる。真新しい軍服が初々しい新兵から強面のベテランまで、軍服の凛々しい美女に敬意を払わぬ者はない。

「あなた達こそ、こんな遅い時間までご苦労様。でも、無理はしないでね……」

目の前で固くなる男達に、彼女はすれ違いざまに満面の笑みで優しく労いの言葉をかける。そして、魅惑的な後ろ姿を無意識のうちに晒しながら去っていく。

膝まである濃紺のタイトスカートに覆われたヒップは、左右均等に大きく張り出した洋梨型。本人は大きすぎると気にしているが、括れのはつきりしたウエストのせいで大きく見えるだけで、実際は九〇センチに満たず体型的なバランスはよい。

脛までを覆う茶色のブーツで引き締められた足はスラリと長く、まるでカモシカのような履物の濃い色が、淡い色合いの肌の美しさをさらに引き立たせている。

「……」

「やはり、いいな……」

足を前に出す度に右に左にと大きく揺れる柔らかかなでん部が、自然と見送る男達の日を

引き寄せてしまふ。

(……もう、聞こえているわよ……)

内耳を悪戯つぽく撫でるひそひそ話に、ほんのりと恥ずかしげに頬を染める彼女の名はナナリー・ラングオールド。唯一の女性乗組員にして、まだ二十五歳という若さながらこの駆逐艦「セイレーン3」を艦長として纏める海軍大佐である。

戦いの時は男勝りの勇氣と優れた洞察力で適切な指示を出して艦隊を勝利へと導き、平穩な時は母性的な優しさで部下達を包み込む美貌の艦長は、日々過酷な任務に追われる海の男達にとって絶対的な信頼を寄せられる有能な指揮官。

そして、疲れた心を癒やしてくれる女神のような存在でもある。

「エンジンの具合はどう？ 異常はない？」

「おお、艦長。快調快調。これなら海の果てまで一気に突っ走れませあ」

やがて機関室にたどり着いたナナリーは、熊のように大柄な初老の男に出迎えられる。短く刈り上げた白髪交じりの髪に無精髭、それに裾をめくった軍服から覗く剛毛の生えた逞しい腕と日焼けした肌が、いかにも屈強な海の男という雰囲気醸し出す彼は機関長のシド・コジャック大尉。

三十以上も年上の彼は、幼くして事故で両親を亡くした彼女にとってには信頼できる部下であると共に、もう一人の父親のように頼れる存在でもある。なぜならただ年上というだ

けでなく、軍艦の艦長だった父の部下であると共に親友。そして、幼い頃はよく娘のように可愛がってくれた優しいおじさんであったのだから。

「海の果てまで？ ふふっ、それは頼もしいわ」

部下の他愛もないジョークに、美人艦長は口元を手で隠しクスクスと無邪気に笑いながら答える。任務中は生真面目で落ち着いた雰囲気の彼女だが、彼の前では時折「シドおじさん」と呼んでなついていた少女に、つつい戻ってしまう。

「ハハハ……まあ冗談は置いといて、こいつのエンジンは優秀ですよ。さすが新鋭艦だけの事はある。俺の若い頃なんか……」

シドもそんな艦長に幼い頃の面影を感じているのか、上官に対してというよりは娘と話すような少し砕けた感じで昔話を語りかける。気さくな態度を見せるのはよくある事だが、今夜はどうも少し様子がおかしい。

こちらに向けられる目が、やけに身体中を嘗め回す視線を送っているように感じられるのだ。

「……どうかしたの？」

「いやねえ、親友の娘さんが今じゃ自分の上官になってるってのが、何だか不思議だね。俺も歳をとったなあ……」

怪訝な顔で尋ねると、初老の大男は軽く顎鬚を撫でながらいつになくしんみりとした口

調で呟く。ここしばらく帝国艦隊との戦闘がなく落ち着いた日々をすごせてきたためか、少し感傷的になつてゐるやうに部下思いの艦長には感じられた。

「機関長……そんな年寄りじみた事を口にするのは、まだ早いわよ」

彼よりはるかに若い自分が口にするのは説得力に欠けるとは感じつつも、励ましたい思いでナナリーは優しく語りかける。まるで老いを気にする父を労わる、親孝行な娘のように。

「ホント。あのおチビちゃんが、もうこんなに立派になつて……」

するとついさつきまでとは打つて変わった嬉しげな口調の返事と共に、口元を歪めた悪戯っぽい笑みが返つて来た。ギラギラとした黒い目が、あからさまに大きく突き出た巨乳の先端に向けられている。

「引つかかった」という思いが、生真面目な艦長の頭をよぎつた。

「ちよつ、やめなさい！ 上官をからかうなんて……」

信頼する部下のとんでもない悪ふざけに焦り、ナナリーは思わず腕組みして豊満な乳房を隠してクイツと身を振つて視線を避ける。柔らかな頬を、熟したリンゴのように真っ赤に染め上げた表情が、実に初々しい。

「機関長ーっ！ それセクハラ入つてるっすよ！」

「まさか艦長の事、狙つてるんじゃないでしょうねっ！」

若手の機関士達が、満面の笑みで面白半分に機関長に呼びかけると、油臭い室内に笑い

声がドツと湧き上がった。最前線という緊迫した海域にありながら、和やかな空気が漂う。「あつ、あなた達まで一緒に……きやあつ！」

ドオンッ!!

ところが一時の安らぎを破壊する轟音が響くと共に、船体大きく揺れた。突発的な衝撃に足元を掬われ、ナナリーはその場にへたり込む。

「だつ、大丈夫ですかい？ 艦長……」

「えつ、ええ……でも……敵襲？ まさかこんな急に……」

艦を預かる責任者たる者、持ち場を離れる前にキチンと状況を確認しておくのは当然の事。ブリッジを出る前にリーダーで周囲に敵がいなのは確認していたにもかかわらず、突如攻撃されたのには冷静な艦長も驚きを隠せない。

額から焦りの一滴が、ジットリと垂れ落ちていく。

ヴーッ！ ヴーッ！ ヴーッ！

「ラッ、ラングオールド艦長!! 至急、ブリッジまでお戻りくださいっ！」

シドに手を引かれて立ち上がると、慌てふためく様子で自分を呼ぶアナウンスと共に、けたたましい警報が響いてきた。すでにブリッジで、かなりの混乱が起きているのが想像できる。

「とにかく、わたしはブリッジに戻るわ。後はお願い」

「ハッ！ お気をつけて」

背筋を伸ばして力強く敬礼する大男を後に、ナナリーは機関室を飛び出して行く。ここまで来る時のゆったりした歩きとは正反対に、けたたましい靴音をカンカンと響かせて。

(……こ、これは、いったい……)

爆音轟く中ブリッジへ駆け込むと、そこは予想以上の混乱の場と化していた。次々と舞い込む劣勢を伝える情報に、振り回される兵士達。今までに奇襲を受けた事がないわけではないが、ここまで逼迫した状況は記憶にない。

「二番砲塔被弾っ！ 砲撃手っ！ 応答しろ！ どうした！」

「右舷第七ブロック出火！ 消火作業急げ！ えっ？ な、何だって？」

「おいっ！ ネプチューンが炎上してるぞ！」

誰も自分が戻ってきたのに気付いている様子はなく、ただマイクに向かって怒鳴るばかり。反撃はしているものの、どこへ攻撃すればいいかわからず闇雲に撃ちまくっているだけのよう。

(このままじゃダメ……よーし)

バンッ！

「みんな落ち着きなさいっ！ そんなにうろたえては、それこそ敵の思う壺よっ！」
目尻をキッと吊り上げた険しい表情で、鉄製の扉を平手で思いっきり叩いて一喝すると、

ざわついていたブリッジ内が水を打ったように静まり返る。普段は温厚な艦長が見せた怒りの形相に、誰もが驚いたに違いない。

「……す、すいません、艦長……」

「取り乱したりして、失礼しました……」

しかし一瞬とはいえ混乱が途切れたおかげで、兵士達は皆落ち着きを取り戻す事ができた。とにかくまずは戦闘から気を逸らして頭を整理させようという、彼女の狙い通りに。

「副艦長、状況を報告して」

「ハッ！ 目下、我が第三機動艦隊は正体不明の艦船……と、おぼしきものと交戦中。その、レーダーもソナーも、それに熱源センサー他の探査装置が、一切敵を捉えられないものでして……」

艦長席に座り、留守を預かっていた痩せ型で神経質そうな面持ちの青年に問いかけると、おどおどした頼りない返事が返ってくる。どうやらはつきりしない状況しか報告できないのに引け目を感じているらしい。また怒鳴られるのではないかと……。

「正体不明？ レギイオンのステルス艦に決まっているわ。敵の情報ぐらい勉強しておきなさい。けど、まさかもう実戦配備されているとは……」

しかしナナリーは部下の気弱な態度を気にも留めず、あっさりと敵の正体を見破ってしまふ。なぜなら軍の諜報部が得たレギイオン軍の兵器技術に関する情報は、開発中とされ

るものを含めて一通り頭に入っているのだから。

そしてその中に、詳細は不明ながらも見えない軍艦に関するものもあつた。

「せいぜいレーダーに映らないぐらいだと思つていたけど、ここまで完璧に消えるとはね。悔しいけど、やはり技術的には向こうの方が何枚も上手だわ……」

座席前のモニターに視線を向け、手元のキーボードを叩きながら、美貌の艦長は目尻をヒクヒクと痙攣させつつ悔しそうに呟く。確かに探査室から送られてくるデータ画像には、敵艦の痕跡を示す物は何もない。

（動体センサーでミサイルは捉えられているけど、噴射熱まで感知できないんじゃないか……）
ら撃ってくるのかわからないわ。かと言って、この暗さじゃ目視なんて無理だろうし……）
外に目を向けても、時折猛スピードで飛んでくるミサイルとそれを受けて爆発炎上する友軍艦があるだけ。各艦がサーチライトで海面を照らすものの、敵の艦船らしき物はまるで見当たらない。

（しかし、いくらなんでもミサイルの噴射熱まで消せるものかしら？）

「ミサイルきますっ！ ブ、ブリッジ……直撃コースですっ！」

考えあぐねているナナリーの耳に、レーダー管制官の上擦った声突き刺さる。一度は落ち着いたものの、真正面から敵弾が来るとなれば慌てるのも無理はない。

「迎撃ミサイル発射！ 全速回避！ 面舵いっぱい、機関出力最大！ 急いで！」

冷静な艦長は焦りもせず、左手をサツと前に突き出して操舵手に凜々しく呼びかける。「お任せをつ！ うおおおおお——つつつつ！」

すると筋肉質な中年男が丸太のような腕で操舵輪をグルグル回す。しかし軍艦とミサイルではスピードは雲泥の差。日頃、この駆逐艦を手足のようには操縦してみせると豪語している彼でも、さすがにこの緊急事態には対応しきれるか微妙なところだ。

「迎撃ミサイル外れましたっ！ 敵弾なおも接近中！ 着弾まであと十秒！」
「機銃掃射開始！ 逃さないで！」

危険を告げるピィピィという甲高いアラート音が耳に纏わり付く中で、ナナリーは汗ばむ両手を思わず握り締める。黒光りするミサイルが激しい銃弾の雨をかくぐり、波しぶきを上げて舵を切るセイレーン3めがけて迫ってきた。

(……くっ、間に合わない……)

こめかみが引き攣り、心臓が破裂しそうなほど激しく高鳴る中で、ついに敵弾は目の前に姿を現す。先端を鋭く尖らせた、円筒形の物体だ。

パンッ！

しかしそれは窓の外ストレスれを通り抜け、衝撃波でガラスを振動させるに留まる。間一髪のところ、かわす事に成功した。

(……今のミサイル、ロケット噴射なしで飛んでいた……という事は！)

すれ違いざまにはつきりと見たミサイルの姿から、優れた観察眼を持つ艦長の頭に敵艦発見の手段が閃く。

「探査室！ 敵はリニアカタパルトを利用してミサイルを射出していると推測される。磁場センサーで海面を警戒。そのデータをリアルタイムでこちらと各砲座へ回して！」

再びキーボードを叩きながら、ナナリーは卓上のマイクに向かって叫ぶ。彼女の言う磁場センサーとは、本来なら地磁気を測定して海底の地形や埋蔵資源の探査を行うための装備。戦闘中に使う事は滅多にない。

「リニア……な、なるほど！ 磁力の反発で撃つなら、噴射熱を感知できるはずがない」
「そういう事。でも、発射の瞬間に出る強力な磁力を検知できるはずよ。敵が電磁波まで消せる技術を持っていないければの話だけ……」

こちらの思惑を読み取り、反撃の糸口を掴めそうな期待感に胸躍らせる副艦長に余裕のある笑みを浮かべつつ答えていると、目の前のモニターに新たなデータ画像が回ってきた。方眼紙のような升目入りのスクリーンに、セイレーン3の周囲の磁場の様子が刻々と伝えられてくる。

「砲撃手、見ているわね。この画像から目を離さないで、そして急激に強力な磁場が発生したら、そこめがけて思いっきり撃ち込みなさいっ！」

「OK艦長！」

「やられた仲間の仇、キツチリとつてやりますよっ！」

探査室に続いて今度は全砲座へ向けて指令を出すと、大砲撃ち達の威勢のいい返事が返ってきた。部下達の様子に頼もしさを感じながら、ナナリーはデータ画面を食い入るように見つめる。

（早くかかってきなさい、その時があなた達の最後よ……）

……ビィーッ！

すると彼女の無言の挑発にのるかのように、磁場センサーが強力な磁気を捉えた。アラーム音と共に、スクリーン上に発生場所を示す赤いシグナルが点る。

「今よ！ 撃てーっ！」

艦長の合図と共に、全砲門が一斉に火を噴いた。何も見えない暗闇めがけて、無数の真っ赤な火の玉が雨霰の如く飛んでいく。

ドドドドドドド—— ツツツツ……ゴオンッ！

数秒後、穏やかな海面に天を突く勢いで火柱が上がった。紅蓮の炎が、海面スレスレに浮かぶ濃紺の菱形の物体を照らし出す。

「あれが……レギイオンのステルス艦……」

ついに姿を現した見えない軍艦は、甲板にブリッジや砲台といった目立つ突起物がなく、まるで海面に溶け込んでいるかのよう。これでは運よくサーチライトで照らせたとしても、

その存在に気付けないかもしれない。

「あんな姿じゃ、昼間でもなければ肉眼でもそうそう見つけられませんね」

「でも見つける方法さえわかれば、もう敵じゃないわ。各艦に通達、磁場センサーを使って……」

……ピーッ！

しかし反撃の手段を掴んだのもつかの間。スクリーン上で艦の真後ろにあたる位置に、非情にもシグナルが点る。距離は五百メートルも離れていない。

「ええっ！ こっ、こんな近くに……」

ドドン！

指示を出す暇もなく、艦全体を揺るがす衝撃が走り船体が大きく右へ傾き始めた。

「機関室に直撃！ エンジン停止してますっ！ し、浸水箇所多数……」

「機関……コジャック機関長！ 応答してっ！ 応答しなさいっ！」

ザザー……。

オペレーターの言い放つ衝撃的な報告に、さすがの沈着冷静な艦長も取り乱さざるを得ない。マイクに向かって必死の形相で叫ぶものの返事はまるでなく、スピーカーからは雑音が響くのみ。ティリグの海の守りの要の一翼を担う強力な駆逐艦も、今や沈みゆく泥舟。時間はほとんど残されていない。

(……もう、みんなを守れない……)

今まで味わった事のない絶望感に打ちひしがれながら、ナナリーはおもむろに全艦一斉放送のスイッチを入れる。

「総員に告ぐ！ ただちに救命艇にて離艦、付近を航行中の友軍艦隊と合流せよ。繰り返す、ただちに離艦せよ……みんな……どうか、無事で……」

震える声で命令を締めくくるとナナリーはマイクを切り、イスから立ち上がって周囲の乗組員達に温かな視線を送る。

「さあ、わたしは全員の脱出を確認してから行くから、あなた達は先に行きなさい……」
そして優しく諭すような口調で、彼らに語りかけた。

「……」

「か、艦長……」

しかし目の前にいるクルーは、誰一人としてブリッジを出ようとしない。確かに、軍艦が海に没する時、最後まで残るのは艦を預かる責任者の義務だが、同時にそれは乗艦と運命を共にする事を暗に示しているのだから。

「……みんなの優しい気持ちはあるがたいけど、でも……本当にわたしの事を大切に思ってくれるなら、どうかこれ以上悲しい思いはさせないで……」

大きな瞳を微かに潤ませながら、ナナリーはつい先程の機関室への直撃で亡くなったで

あろう機関長の事をそれとなく語る。艦長が彼を父のように慕っているのはクルー全員が知る事。もう誰も犠牲にしたくない思いが、ヒシヒシと伝わってきた。

「……わかりました、お先に失礼します……」

「……ご武運を……」

部下思いの艦長に向かって背筋を伸ばしてサツと敬礼すると、兵士達は慌しく飛び出して行く。再び会える事を信じて。

「……」

彼らを見送った後で再びイスに腰を下ろし、ナナリーは大きくため息をつく。そして、胸ポケットから色褪せた写真を取り出した。

「父さん……母さん……」

幼い頃、まだ健在だった両親と共に撮った思い出の一枚。そこには父の逞しい腕に抱き抱えられ、彼の軍帽をかぶって無邪気に敬礼する幼き日の自分と、隣に立って笑顔で見つめている母の姿がある。

「……わたし、父さんみたいには……なれなかつたわ……ごめんなさい……」

祖国のために働く父を誇りに思い、幼い頃から彼に負けない立派な艦長になろうと努力し続けてきたナナリー。しかし志半ばにしてその夢が費えたのを感じ取り、悲しげに呟く。

「艦長！ まだいたんですかっ!! まさかとは思ったが……」

するとそこへ、背後から聞き覚えのある野太い叫び声が飛び込んできた。慌てて振り返ると、血まみれの額を左手で押さえながら、ヨロヨロと初老の大男が入り込んでくる。

「コジャック機関長！ よ、よかった……無事で、本当に、無事でえ……」

もはや生存は絶望的と思われると思われていた大切な人の出現に胸が震え、大きな瞳からは喜びの雫が止め処なく溢れ出る。艦長という立場を一瞬忘れ、子供のように泣きじゃくる彼女の元へ、彼はよろめきながらも一步一步踏み出し、ゆっくりと近づいてきた。

そして半ば強引に、柔らかな体軀を毛むくじやらの逞しい腕で抱き抱える。

「なっ、何をするのっ！ わたしは艦長よ！ だから……」

「艦と命を共にするなんて言わせませんぜ！ ダチの娘を見殺しにしたとあっちゃ、あの世で言い訳もできやしねえ！」

荒っぽい言葉を浴びせつつも、娘を思う父親のような優しい目付きで見つめながら、シドはずしずしと窓際に歩み寄り、太い足で分厚いガラスを力いっぱい蹴りつけた。分厚い防弾ガラスが、薄氷同然に砕け散る。

「離して！ 離しなさいっ！」

「生き延びられたら、軍法会議でも何でも受けます。御免！」

ジタバタと駄々っ子のように暴れる艦長に悪戯っぽく微笑みかけると、シドは割れた窓から外へ飛び出した。暗黒の海めがけて、美女をしつかりと抱き抱えた巨漢が宙に舞う。

「……ひうつ……」

強く唇を噛んで堪えるものの、股間から尾てい骨に向けて幾本もの淫靡な電気信号が走り、自然と腰から下がビクビクと痙攣してしまう。強引に目覚めさせられた快感が、いくら頭で拒絶しても止まらない。

「あつ、あうんっ！」

ヌチュツ……。

顎を反らし、苦しげに喘いだ瞬間、肉穴の奥から柑橘類のような甘酸っぱい香りと共に透明な粘液を滴らせ始めた。サラサラの薄いアンダーヘアが徐々に湿り気を帯びて、指で弄られる度にシャクシャクとリンゴの皮を剥くような瑞々しい音を立てていく。

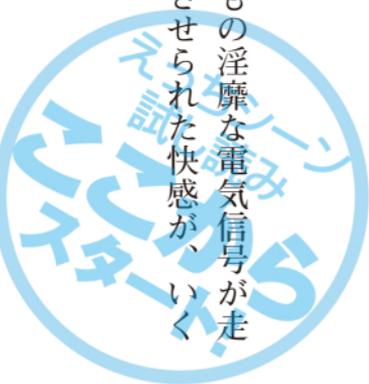
「ほおー、随分と感度がいいな、もうこんなになってるぜ。欲しくてたまらないんだろ」唇をペロリと舐め回し、わざとらしく驚いたふりをしながらハルダーは、指に絡めた恥蜜をペタペタと、朱に染まった頬や口元に塗りつけてくる。

「そつ、そんな事……ない、うぐうっ！」

ブチュツ！

反論しようとした口が、ガサガサにひび割れた唇で塞がれた。さらに閉ざした前歯を強引に挟じ開けて、生暖かい舌が滑り込んでくる。タバコ臭い唾液と共に。

「んんっ！んっ、んっ……」



(こ、こんな男に……こんな男に……)

幼い頃に、ふざけ半分でシドおじさんにしてあげて以来のセカンドキス。次は将来を共にすごせるほど心から愛する人にしてあげるはずだった神聖な儀式が、邪悪な男によつて無残に壊されていく。

「ぐうんっ、だっ、だめ……んんっ！」

柔らかな内頬を、ザラついた舌が縦横無尽に擦り回る。その間、股間への責めも休んではいけない。口腔内と膣口、二箇所を同時に蹂躪されるナナリーは恥ずかしさと悔しさ、それに望まざる快感への戸惑いに混乱し、頭の中がぼやけて全身から力が抜けていく。

「ぶはっ、さあーて、だいぶ頃合もいようだし、そろそろ入れてやるとするか。目を逸らさないで、ちゃんと見ろよ」

散々長い舌で口の中をかき回された後で、ようやく開放されたナナリーの耳に興奮気味のハアハアという荒い息に混じった囁きが聞こえてくる。言われるままに視線を向ければ、腰を跨ぐ形でハルダーが仁王立ちし、膨れ上がった一物をこれ見よがしに曝け出していた。

「ひいっ！」

臍まで大きく反り返った、赤黒い円筒形の物体。先端に丸みを帯びて尖らせた姿は、まるで肉でできた魚雷のよう。太さも、昨晚見せ付けられた浣腸器に引けを取らない。

表皮に走る幾本もの青い稲妻と、先端の割れ目から滴る先走り汁がもたらす妖しい輝き

が、初めて男根を目の当たりにする勇敢な女艦長の心に恐怖心をかき立てた。

（あ、あんな……おぞましい物が、わたしの中に……）

「いくぜ、すっかりその身に刻んでおけよ。これからお世話してあげるありがたいモノだからなあっ！」

醜悪な物体の姿に混乱し、全身を硬直させる半裸の美人艦長のだらしなく開いた股の間に身を屈め、卑劣な所長は己が分身を粘液にまみれた乙女の丘へとあてがう。そして腰を突き出し、熱く火照って膨らんだ龟头を押し込んできた。

「まっ、待って……ひぎいいつつっ！」

ギチュツ！

極太の肉魚雷を股間に打ち込まれた瞬間、身を引き裂かれたかと思うほどの痛みが下腹部全体に走る。抉じ開けられた肉穴の下端から蟻の門渡りを経て滴り落ちる鮮血が、黄色いトラの体毛に赤いスポットを刻みつけた。

「まさかとは思ったけど、初モノか。こんなべっぴんな艦長さんのを頂けるなんて、運がいいぜ俺は……」

敏感な一物に纏わり付く秘唇の熱さと締め付けに、ますます興奮したサディスト所長は遠慮なく腰を突き動かし、ビクビクと脈打つ火照った肉棒を押し込んできた。

大きく開いたエラから胴、さらに互いの陰毛が絡み合うほど突っ込んできては、抜ける

ギリギリのところまで腰を引く。ストロークの長いピストン運動で、初物美人艦長の膣内を堪能する。

「あうっ、ひっ、ひいっ、こっ、こんなの……激しすぎ……こっ、壊れ……ちやうっ、あうんっ！」

産道を内側から押し広げられ、肉壁を固い亀頭の傘で擦られる衝撃に、ナナリーは身を堪えきれず反らして喘ぐ。しかも、耐えられないのは彼女の肉体ばかりではない。突き上げられる度に激しく波打つ巨乳をpushさえきれず、軍服のボタンがプチプチと弾け飛ぶ。

「きゃっ！」

柔らかな肉体を包む上着の胸元が弾け、小さめの三角カップのブラで締め付けられた乳房が本人の意思を無視して飛び出してきた。

「おおー、サービス旺盛だな。こっちも使って欲しいとは……」

わざとらしい歓喜の声を上げると、ハルダーは節くれた指で強引にブラジャーを首の辺りまでたくし上げる。そして剥き出した二つの巨大プディングを力いっぱい鷲掴みにして、指の股で天辺に戴いた薄紅色の乳首を挟み込んだ。

「ひいっ！ きっ、きつい……あうんっ！」

桜の蕾のような突端に激しい痺れが襲い、釣鐘型の乳房に放射状に広がっていく。「ふふうー、柔らかくて気持ちいいぜ」

手の平に広がる湿った柔肌の吸い付くプリプリとした感触に酔いしれ、無邪気に泥団子作りに興じる子供のように手の中の獲物を揉みくちやにしつつ、ハルダーはより強く美人艦長の膺内の感触を味わおうと腰の振り方を変えてきた。

ぐちやつ、じゆるっじゅぐっじゅるっ……。

股間を前に突き出しつつ尻を円を描くように振り、引き抜く時は身体全体を上下に揺らして、ヴァギナの中を駆け抜ける一物の動きに変化を加える。

一突きごとに長いペニスの締め付けられる部位が、ある時は亀頭のエラ下に、またある時は裏筋の周りにと微妙に変わり、邪悪な強姦魔を飽きさせない。

「ぎひいっ！ あっ、あぐうっ……」

一方で息が詰まるかと思うほど胸を締められながら、肉壺の中を極太の肉魚雷でかき回される女艦長は、苦痛のあまりその美貌を大きく歪める。もはや卑劣な敵に弱みを見せまいとするだけの気力は失せ始めていた。

「何だよ、その顔は。せっかく女にしてやったんだから嬉しそうにしるよ。そっちの金髪みたいにな」

吐き捨てるように言っつて鬼畜所長が顎でTVモニターを指し示すと、そこには画面いっぱいに映るアンジェリカの姿が。なおも作り笑いを強要されつつ女に飢えたケダモノ達の相手をさせられる彼女は、いつの間にかスカートのみならず上着も剥ぎ取られ、全身白濁

液まみれに。

「また顔にぶっかけてやるぞ、嬉しいか？」

「はっ、はいいい……嬉しいですよ……」

仲間を救うために鬼畜な監守達に気に入られようと、美少女海兵は懸命に奉仕する。甘ったるい声を上げて悶え、身をくねらせていきり立つ一物を次々と満足させ、酷い仕打ちに喜んでいるかのように微笑んでみせるものの、心の中で泣いているのが画面の中から滲み出ていた。

気弱な少女の健気な姿をあらためて目の当たりにして、ナナリーの胸に新たな闘志の火が点る。

（あの子も必死に戦ってる。わたしだって……）

たとえ我が身は汚されても、今この場で目の前に伸し掛かる鬼畜所長を満足させれば囚われの部下に危害が及ばないはず。心の中に沸き立つ屈辱を押し殺し、ナナリーは健気に微笑んでみせる。目尻を下げ、桜色の唇を微かに開いて。

「くっ、うふう……」

自分でも笑い声かため息か、区別の付かない奇妙で情けない音が、半開きの口から漏れた。「そうそう、嫌がる女の犯すのもいいが、無理矢理やられて嬉しいがる女つてのもたまらねえぜ……」

気丈な敵軍の女を制圧した悦びと興奮に、ハルダーはさらに激しく腰を振る。

ぐちゃぐちゅ、ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ……。

粘り気のある水音を立てる肉壺の中で爆発寸前にまで膨れ上がった肉魚雷が暴れ回り、まだ男のモノを受け入れるのに慣れていない女体を、内側から激しく責め立てる。僅かに棒状に膨らんだ下腹部が熱く、今にも火傷してしまいそう。

「いひっ、あっあっあっ、はああんっ！」

股間が奏でる淫靡な調べをかき消す程の喘ぎ声を上げて、作り笑顔の女艦長は犯されて喜ぶ淫らな女を不本意ながらも演じてみせる。目の前で邪悪な笑みを湛え、みつともなく腰を振る卑劣な所長を喜ばせ、仲間を救うために。

「よっ、よーし！ そろそろ……出すぞ！」

するとハルダーは耳元に顔を押し付けて、擦れた声で驚くべき事態の到来を告げてきた。「出す……そ、それだけは……それだけは許して……」

ついにやってきた受精の瞬間。さすがに我が身を犠牲にして部下を救う決心をした誇り高き海軍大佐とはいえ、憎むべき卑劣な男の子を身籠りかねない事態は受け入れられない。艦長という役職の重さで覆い隠していたか弱い乙女の顔が表にあらわれ、背中を擦り腰をずらして一物を引き抜こうとする。

しかし上から押し掛かかかられていては外しようがない。それどころか逆に中に突きこま

れたペニスを余計に揉み扱き、発射の時を早めるばかりだ。ポコポコと血管を浮き立たせた男根の表面が、熱蜜を纏った肉壁で揉み扱かれる。

「おおっ、積極的だなあっ！ よーし、お望み通り、お前の腔な内埋めか尽くしてやるうっ！」

「だっ、だめえっ！ いやあああああ————つつつつ！」

ドプジュルルルルツツツ！ ドプッドプッドプッドプッドプッドプッ……。

天井を突き破りそうなほどの絶叫も空しく、下腹部の中に熱湯を注ぎ込まれたような熱さが広がっていくのを感じ取った。

（こ、こんな男の子を……産まされるの？ わたし……）

チュポツ……。

卑劣な敵兵の子種を押し付けられ、茫然自失となるナナリーの耳に小さな水音が股間から届く。ヴァギナの中を名残惜しそうにかき回していた、未だ固さ衰えない一物が引き抜かれた。

「よかつたぜ。この調子で、明日からも頼むぜ……」

傍らに置かれた葉巻に火を点け、一服しながらハルダーは傷ついた乙女心を逆なでするように無神経な口調で言い放つ。

（終わった……のよね）

明日からの事を考えると気が重いが、とりあえず今は休みたい。ポロポロになった身を

起こして、ナナリーは乱れた服を調べようとする。

「所長、そろそろいいですかい？」

「俺達待ちくたびれちゃいましたよー」

「まったく、もういきり立ってしょうがないですぜ」

するといきなり扉が開き、ドカドカとやかましい足音を立てながら入り込んでくる者達
がいた。ここまでエスコートしてきた大男と二人の監守。ドレッドヘアーで筋肉質な若者。
そして髭面の小柄な中年男だ。

(な、何……)

反射的に部屋の入り口に目を向けた肌も露わな美人艦長は、そこに立つ三人組の姿に唾
然とする。いずれ劣らぬ醜悪な一物を充血させ、まだ隠しきれていない乳房や、膣内に収
まりきらないスペルマを滴らせる肉割れに、厭らしい視線を送りつつノッシノッシと迫っ
てきていた。

「おお来たか。見ての通り、この艦長さんも俺達のために何でもシテくれるそうだ。遠慮
なく使つてやれ」

「へへへ、そうこなくっちゃ。じゃ、まずは俺からだな。約束通りこいつのケツヴァージ
ンは頂きますぜ、所長」

上司の許しを得た禿男が、嬉々として半裸の美女をトラの敷物の上へうつ伏せに押し倒

す。そして柔らかなでん部を握り締め、左右に大きく割り開いた。

「きゃあっ！」

咄嗟に尻溝の上に手を回し、曝け出された肛門を覆い隠す。しかしか細い手を髭面の看守に掴まれ、後ろ手に縛り上げられてしまった。

「おっと、抵抗するなよ。言う事聞かないと仲間がどうなるか、わかってるだろう……」
 まるで菊座に話しかけるような大男の声が、生暖かい吐息と共に吐きかけられる。皺の一本一本まで数えられているかと思うほどの視線が、自分では決して見る事のない恥部に注がれているのを感じ取った。

「いつ、いつたい何をする気……びひやあっ！」

振り向き、憎きサディスト監守を睨みつけて罵声を浴びせようとした瞬間、肛門の周りを茹でたナメクジが這い回るような奇妙な感触が走る。どうやら菊花の溝に沿って、唾液まみれのザラついた舌を這わせているらしい。

「きひいつ！ やっ、やめ……て……」

あまりのくすぐったさと行為の不気味さに全身鳥肌が立ち、顔を引き攣らせてナナリーは素っ頓狂な悲鳴を上げる。上へ下へ、右へ左へと縦横無尽に這い回る舌先は、まるで人として最も汚れる部位を掃き清めていくかのよう。

「ふうー、綺麗になっただぜ。それじゃあ、頂くとするか……」

しばらくして軟体の攻撃が収まったかと思うと、今度は何やら固めのゴムのように弾力のある物があてがわれた。

「まっ！ まさか……そ、そんなところに……」

肛門に松明でも押し付けられたような熱さを感じ、咄嗟に身を振って抵抗する。しかし桃尻を指が食い込むほど強く握られては逃れようがない。なす術もなく、キュツと窄まった紅色の菊の花に、真っ赤に膨れ上がった肉雄蕊が強引に捻じ込まれる。

「ひぎいつ！ あっ、あ……うぐうっ……ひっ、広がるうっ！ ああんっ！ いっ、いやあっ！」

腸壁の肉襞をコリコリと亀頭のエラで擦りながら、極太の肉魚雷が直腸内を進行していく。排泄では感じる事のなかった拡張感に襲われて、ナナリーは頭を左右に大きく振って泣き叫ぶ。しかし鬼畜な大男は聞く耳持たず、あっと言う間に長い一物すべてを尻穴の奥底まで押し込んでしまった。

「おいおい、力抜かないと切れちまうぜ。さて……」

そして呆れたような口調で話しかけながら、ゴロリと仰向けに横たわる。そして膝の裏を太い指でガッチリと握り締め、大きく「M」字型に広げた。

「よーし、次は俺だ。そのまま押さえていてくれよ」

続けてドレッドヘアアの若者が覆いかぶさり、極太の肉魚雷を無理矢理撃ち込まれてま

だ広がったままの肉穴に、いきり立つ己が分身の先端をあてがい、力任せに腰を突き出してくる。

「あぎいつ！　いつ、痛い……」

ズブリユツ！　ジュブジュブジュブツ！

「うおっ、すげえきつい……こいつは、いいぜ……」

処女膜を失ったとはいえ、まだまだこなれていない肉のクレヴァスはかなり狭い。突き立てられた一物を、力強く抱きしめて迎え入れてしまう。

「あっあうっ！　んぐうっ……」

顎を天に向くほど反らして喘ぐ口が、突如として塞がれる。

「俺はこっちでいいぜ、今日はな……」

いつの間にか顔のすぐ脇で屈み込んでいた髭面男が、カチカチにいきり立った男根を開いた唇の中へ捻じ込んできた。

「ひぐうっ！　くっ、くひゃあい！」

口の中から鼻へ抜ける悪臭に、思わず捻じ込まれた一物を吐き出しそうになるものの顎を押さえられて阻止されてしまう。

「おおっと、俺がイクまでは口から出すんじゃないやねえぜ。さあ、こいつを舐めるんだ。仲間を助けたいんだろう？」

「むぐ……」

言われるままに舌を這わせる。今日この場で初めて男を知った彼女に、フェラチオの知識などあるはずもない。しかし部下のためにどうにかしてこの監守を悦ばせようと、口腔内でビクビクと痙攣するペニスに懸命に舌を這わせる。

「んっ、んっんっんっ……」

「へっ、へタクソだなあ。だっ、だけどその初々しいところが……いいぜ……」

たどたどしく震える舌先で、表皮を軽く撫でるだけしかできない口奉仕。だが相手の持ち物がよほど敏感なのか、それでも満足げに喘いでくれるのがナナリーにとっては不幸中の幸いだった。

「よし、それじゃあ」

「俺達も始めるとするか」

すると彼女をサンドイッチにしたままで、しばらく様子を見ていた男達が一斉に動き出す。ぐちゃぐちゃと粘り気のある音を立てながら、前後の肉穴に突き立てられた男根が激しく出入りし、薄い腹膜を挟んで下腹部の中でぶつかりあう。

「あひいっ！ こっ、こはれるふう……むぐんっ！」

太い肉棒で口を塞がれ、声にならない叫びを上げるナナリーは上からは股間を押し貫かれ、下からはアナルを突き上げられ、まるで津波に煽られる小船のように翻弄される。激

しい責めに混乱し、自分がどうなっていくのかわからない。

（なっ、何なの……これは……）

だが、一つだけわかつている事がある。それは股間の奥底で目覚め始めている、ジンワリと痺れる心地よさ。無理矢理犯されているはずなのに、いつまでも浸っていたいような危険で甘美な刺激が、気丈な女艦長の心を桃色に染め上げようとしていた。

（わたし、感じてる？ そ、そんな事……あるわけ、ない……）

肉体に起こり始めている変化に戸惑う彼女の耳に、不気味な囁き声が絡み付いてくる。

「ううっ、そ、そろそろ出さずえっ！」

横たわる大男がラストスパートをかけるべく、ナナリーを頭上に放り出してしまいそうな勢いで尻穴を突き上げれば。

「ああ、お、俺もだ……もう、たまんねえ」

ドレッドの若者も、繋がった秘所同士が解けてしまいそうなほどの摩擦熱を上げて腰を激しく振り動かす。

「よーし、じゃ俺も、ぶっかけてやるか」

中年男が口からペニスを引き抜き、大きく開いた亀頭の割れ目を目の前に突き出してくる。三者三様の発射準備の完了だ。

「むんぐっ！ やっ、やめてえっ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>